

〔徒然草〕下心さらにおごらずとも、佛前にありて、すゝをとり經をとらば、怠るうちにも善業おのづから修せられ散亂の心ながらも、繩床に座せば、覺えずして禪定なるべし。

〔徒然草〕諸抄大成十三繩床は床になはを張て其上に居る也、又木綿をもはるなり、座禪工夫の床也、諸床字、台家には清てよみ、律宗には濁りてよむなり、今爰にては清てよむべし、兼好台家の學者なればなり、參

竹床

〔名物六帖〕器財三竹床シヤウキ

〔菅家後集〕題竹床子通事李彦環所送

彦環送與竹繩床、甚好施來在草堂、應是商人留別去、自今遷客著相將、空心舊爲遙踰海、落淚新如昔、殖湘不費一錢、得唐物、寄身偏愛惜風霜。

〔雍州府志〕七竹具 建仁寺町大佛前、亦以竹造諸品物、中竹床略、中等物無不有。

床机

〔運步色葉集〕志床机懸腰之物 將机

〔增補下學集〕下床机シヤウキ

〔書言字考〕節用集七床机同上 ○

〔和漢三才圖會〕三十二將机シヤウキ 牀几俗

按此器中古之制、軍中所用大將腰掛以休息、俗呼爲將几、或用牀几二字、不當於理、大抵長一尺五寸、橫八寸、高亦一尺五寸、其中間以釘爲機、可折疊之、譬當處張革、

今猿樂謠舞、打大鼓小鼓之輩用之、

尋常シヤウカケ凳之小者亦名小几、只稱腰掛可矣、

〔倭訓栞〕中編九さうぎ 閑居の友に、山のふもとにいほりかたのやうかまへて、さうぎといふも